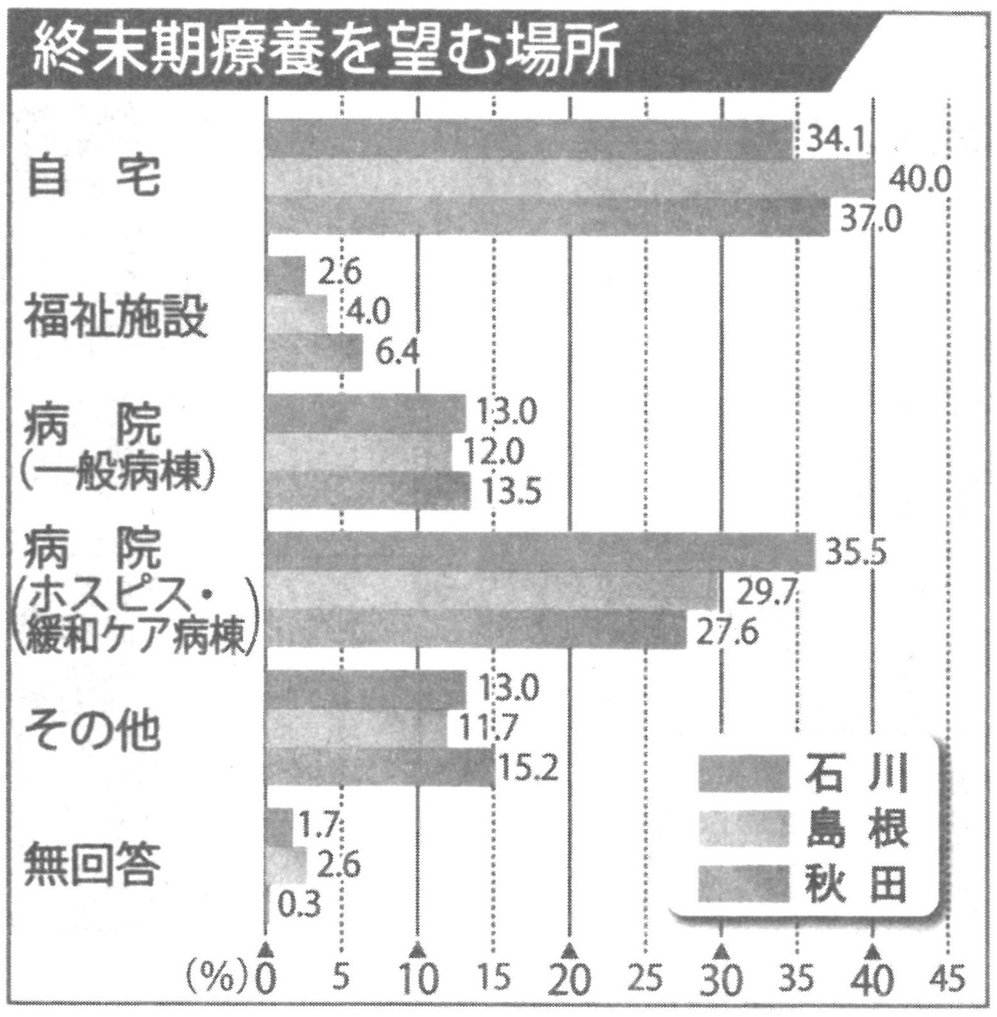
最期は家より病院

34% 白山麓など終末期調査 48%



「家族に迷惑掛けずに」

県立看護大と秋田、島根協力

ホスピス・緩和ケア希望

石川県立看護大の浅見洋教授らのグループが行った「終末期療養を望む場所」の意識調査で、白山麓では病院を希望する人が48・5％となり、自宅の34・1％を上回った。少子高齢化が進む地域では、医療過疎や老老介護の問題を抱えており、浅見教授は「在宅介護を経験した人は、自分は家族に迷惑を掛けたくないという思いがある」と分析する。研究グループは、今後、病院での最期を望む傾向は強まるとみている。

意識調査は、石川、島根、秋田県の「ルーラルエリア」（田舎）で、2011年8、9月、石川県立看護大看護学部と秋田大大学院医学研究科、島根県立大看護学部、島根大教育学部が協力して実施した。

石川県では白山麓の旧5村地域が対象となり、島根県は江津市の江津地域、秋田県は北秋田市の阿仁地域で調査が行われた。各地域で40～70代の800人ずつを選び、合計2400人のうち993人の有効回答を得た。

白山麓で病院希望者の内訳は、ホスピス・緩和ケア病棟が35・5％で、一般病棟が13・0％だった。

3地域全体では、自宅37・1％、病院（ホスピス・緩和ケア病棟）31・1％、病院（一般病棟）12・8％、福祉施設4・2％の順となった。「理想的な死」の問いに対しては、病院希望者、自宅希望者ともに「周囲に迷惑を掛けない」が最も多く、「苦痛が少ない」「自然な死である」が続いた。

12年度の厚生労働省「終末期医療に関する意識調査」では約60％が自宅療養を希望していた。

浅見教授のグループが06年に白山麓で行った調査では、自宅希望者は今回の34・1％より高い39・2％だった。奥能登での調査でも自宅希望者は07年の48・1％から10年の42・0％に減少し、病院希望者は26・4％から30・1％に増加している。

介護経験者ほど

真宗ビハーラの会石川会長で真宗大谷派幸圓寺（こうえんじ）の幸村（ゆきむら）明住職＝金沢市金石西4丁目＝は福祉や医療現場で高齢者や患者の話し相手になり、苦痛緩和や癒やしを与える「ビハーラ」を実践している。幸村住職は「かつて田舎で当然のように在宅介護をしてきた人ほど、家族に迷惑を掛けたくないという意識が強い」と指摘する。

石川県内のホスピス・緩和ケア病棟は2病院、38病床で、浅見教授は終末期療養で緩和ケアを希望してもかなえられない人が多いとし、「今後、さらに病院での緩和ケアを希望する傾向は強くなると思う。今のままでは受け皿が足りない」と指摘した。

北國新聞・朝刊
2014年1月29日（水）